

# 大学生の怒りの感情制御方略とクロニンジャーのパーソナリティ理論との関連について

富岡美咲<sup>1</sup>・平井正三郎<sup>2</sup>

(1: 東海学院大学大学院, 2: 東海学院大学)

## 要 約

喜怒哀楽の様々な感情を体験した際、どのような感情制御方略を用いて対処するのであろうか。また、その感情制御方略はどのようにして個人に培われるのであろうか。そこで、本研究では、大学生を対象に、喜怒哀楽の中でも対人関係を大きく左右させる“怒り”に焦点を当て、パーソナリティを無意識で自動行動をとる4気質と意識的で自覚・計画された行動をとる3性格の7次元で捉えたクロニンジャー理論を基に主に仮説検証により関連を検討した。その結果、怒りの感情制御方略は無意識的な気質である損害回避と報酬依存という行動を抑制または維持する傾向が伺えた。また、抑制や認知的再評価と関連する第三者への表出との関連も伺えた。それはまた、女性により顕著であることが示唆された。さらに、ビッグファイブ理論に基づく尺度と比較した結果、5因子特性の中で誠実性は上述の2気質と、調和性は意識的な行動である2性格との関連を示した以外、外向性・神経症傾向・開放性はクロニンジャー理論の気質・性格の両面での関連を示した。

キーワード：感情制御 パーソナリティ クロニンジャー理論 ビッグファイブ

(2017.9.6 受稿 査読審査を経て 2017.10.23 受理)

## 1. 問題

### 1-1. 感情制御とは

喜怒哀楽の様々な感情を我々は日々体験する。多様な感情を経験した際、感情の赴くままに反応するわけにいかないこともあり(大平, 2004)、状況や他者との関係性を考慮し感情の制御を行いつつ(Gross, 1998)、対人コミュニケーションをとっている。Gross(1999)はこの感情制御を「どのような感情を抱くか、いつ抱くか、どのように経験もしくは表出するかに影響を与えるプロセス」と定義している(金井・湯川, 2017)。

感情制御は日々の生活と関連するゆえ実証的研究は盛んになされている。例えば、感情制御の能力について、Matsumoto, LeRoux, Iwamoto, Rogers, Tatani, & Uchida(2003)や明石(2008)らは、感情制御方略の高さ(低さ)が、メンタルヘルスを始めとするウェルビーイング(イルビーイング)を予測することを報告している。つまり、感情制御方略は、対人関係を円滑にする機能を持ち、メンタルヘルスの保持・増進に多面的な影響を与えることが伺える。

感情制御方略についてさまざまな知見があるが、Gross

& John(2003)は、内面に感情を抑え込む抑制と状況を変え再解釈することで感情を調節する再認知的評価の2つに感情制御の方略を分類した。近年では生じた感情の表出行動を抑える抑制と、感情と関連する出来事の再解釈により感情の生起を調整する認知的再評価が好例である。金井・湯川(2017)は、感情抑制傾向の高い人はイルビーイング傾向を示し(Pennebaker, 1997)、認知的再評価の使用傾向が高い人はウェルビーイング傾向にあると報告している(Gross & John, 2003)。

さて、喜怒哀楽の中でその感情表出が対人関係で問題を孕むのは怒りの感情ではないだろうか。喜び・楽しみは歓喜という快感情の表出で相互に共有しあえるが、悲嘆にくれたり沈痛な気持ちなどの哀しみの感情表出は、被表出者に同情はさせても不快感を催させることは余り想定できず、対人関係が深まりはせずとも亀裂が生じることはないであろう。一方、不快感情である怒りの感情は、その怒りの被表出者には決して心地よいものとはいえず、不愉快など不快感情が惹起することが予測され、対人関係性を疎にはしても密にはしにくいであろう。よって、怒りの感情を体験後の感情制御方略、抑制や再認

知的評価等を本研究の主テーマの1つとする。

怒りの感情制御方略について吉田・高井（2008）は、一方的表出、建設的表出、第三者への表出、抑制、視点転換の試みの5下位因子に分類できると報告している。一方的表出は相手に配慮せず怒り感情を直接表出する方略、建設的表出は相手に配慮し問題解決を志向する方略、第三者への表出は感情体験の相手ではなく第三者に対し感情を表出する方略、抑制は感情を表に出さず内面にかかえ続ける方略、視点転換の試みは怒り感情を視点転換により低減させる方略である。吉田・高井（2008）は怒り感情の5制御方略が、その関係性に与える影響や自己評価に与える影響を検討し、その結果、怒りの建設的表出、視点転換の試みが他者との関係性を高め、逆に怒りの抑制は関係性を低めたと報告している。

宮明・伊藤（2014）は上記の吉田・高井（2008）と Gross & John（2003）が挙げた感情制御方略は、自己を守ることに着眼点が置かれており、自分のために情動制御を行うだけでは対人関係の問題は解決しづらいと指摘した。そこで、各々の方略を整理し、一方的表出、建設的表出、抑制の3下位因子に、建設的抑制という、自己に生じた感情を減少させ感情を抑制・表出することなく問題解決に向かう下位因子を加え4下位因子に分類した。この最後の建設的抑制は、自己に生じた感情を弱めることで相手と冷静に話し合えるよう情動を調整する機能である。

さて、人々が行うこれらの感情制御には性差があることは先行研究で既に検討されている。樫村・岩満（2007）は男性より女性の方がネガティブ感情・ポジティブ感情の両感情で抑制傾向にあると報告しているが、稲嶺・遠藤（2009）は男性より女性の方が全ての感情で表出の程度が高いとし、安定した研究結果は得られていない。

また、宮明・伊藤（2014）は感情制御方略と他者との親密性を検討し、建設的抑制と建設的表出が親密性を高めたと報告しているゆえ、抑制と再認知的評価の既述の感情制御方略が、社会適応をはじめとするウェルビーイングとの関連性が伺えるようである。

認知的再評価に関しては、建設的抑制・表出以外に、前述の吉田・高井（2008）が挙げた第三者への表出との関連も考慮されるべきといえる。これは感情体験直後の感情制御ではなく時間的経過後の感情制御方略であることによる。

## 1-2. 感情制御方略の発達・成立

感情制御方略・感情制御能力はいつ頃発達・成熟するのだろうか。塚本（1997）は5歳児、7歳児、9歳児を対象に例話を提示し、その状況でどのような表情をするのか選択させ、その理由を尋ね、表出を統制すべき感情とその場面に関する知識について検討した。その結果、5歳児は感情表出を統制する必要性自体を十分理解しておらず、一方的表出するが、7歳では感情表出の統制が必要という理解が進むが、どのような社会的・対人場面で統制を行うかは理解不十分である。9歳では感情表出の統制の理解とそれを遂行すべき場面の理解がともに発達し、他者の存在の有無で統制行動を明確に使い分けられるようになるという報告している。また、平川（2009）は、幼児を対象に主人公の情動とその情動表出を制御する動機が明示された話を提示後、主人公の表情と行動を選択する個別実験を行った。その結果、行動の制御は有意な差がなく、表情の制御では年中児より年長児の方が理解に長け、情動表出は行動レベルで年中児段階での習得を報告している。このように、感情制御能力は比較的早い段階で獲得されることが明らかとなっている。

幼児期の他に、青年期も当然注目される。青年期は心身や認知能力の成長・発達だけでなく、社会的な変化に伴い疾風怒濤期のごとく多様な感情を経験する一方、スチューデントアパシーや破瓜型統合失調症など精神的病理が発現する割合が高くなるという理由からであると考えられている（Galambos & Costigan, 2003）。

## 1-3. 感情制御とパーソナリティとの関連

パーソナリティ（人格・性格）は、児童期までは気質のような生得的素質と養育行動などの環境要因の相互作用によって形成され、自己の内面に目が向けられるようになる青年期に入ると、本人の主体的努力もその形成に関与するといわれているが（託摩, 1967; 鈴木, 1992）、上述のように感情制御能力の発達にパーソナリティ要因の影響が考えられる。

Matsumoto（2006）は、感情制御とパーソナリティとの関連についてNEO-FFI（NEO-PI-Rの短縮版, Five Factor Inventory）を用いて検討した結果、神経症傾向は情動安定性の対概念であり、感情制御に深く関連した特性と報告している。また、明石（2008）は、神経症傾向は情動の不安定性の指標であり、感情制御との相関が高いことを指摘している。さらに、下仲・中里・権藤・高山（1992）は、神経症傾向が高いほど怒りを調整できず、情動的な

問題が多いことを示している。この NEO-FFI は現在ではパーソナリティ理論として確固たる実証的知見をもつビッグファイブ特性、5 因子論（外向性、神経症傾向、誠実性、調和性、開放性）をもとにした尺度で、Daniel (2007) による理論の要約を下表（表 1）に示す。

表1 ビッグファイブの要約

次元	コアメカニズム	利益	コスト
外向性	報酬への反応(中脳ドーパミン報酬システム)	報酬を求め手に入れることの増強	肉体的な危険、家族の安定欠如
神経質傾向	脅威への反応(扁桃及び大脳辺縁系、セロトニン)	警戒、努力	不安、うつ
勤働性(誠実性)	反応抑制(背外側前頭前皮質)	プランニング、自己抑制	融通のなさ、自発的反応の欠如
調和性(協調性)	他者への配慮(心の理論、共感要素)	調和的社会関係	ステータスを失う
開放性	心の連想の広がり	芸術的感性、拡散的思考	異常な信念、精神病傾向

出典: Daniel(2007)の表をもとに作成した

一方、最近ではクロニンジャーのパーソナリティ理論(7次元モデル)が周知されつつある(Cloninger, 1993; 丹野, 2003; 木島, 2014)。木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村(1996)によれば、ビッグファイブや5因子論のように従来の特性論に立脚するパーソナリティを、無意識的な行動を主とする遺伝的傾向を示す気質(4因子)と、成長・発達の過程で成人期までに新たに創造され、学習をもとにした意識的な行動として現れる性格(3因子)の2側面から捉えるものである。

クロニンジャー(1993)は、無意識的な行動として現れる「気質」の4因子の特性として、「新奇性探究」(Novelty Seeking; NS), 「損害回避」 Harm Avoidance; HA), 「報酬依存」(Reward Dependence; RD), 「固執」(Persistence; PS)を抽出し、また、学習による意識的な行動をとる「性質」として「自己志向性」(Self Directedness; SD), 「協調性」(Cooperativeness; CO), 「自己超越性」(Self Transcendence; ST)の3因子をあげている(丹野, 2004; 木島, 2014)(図1. 参照)。また、先行研究を基にこのクロニンジャー理論を要約すれば下表(表2)のようになる(丹野, 2003; 国里・山口・鈴木, 2004; 中川・佐藤, 2010; 木島, 2014)。

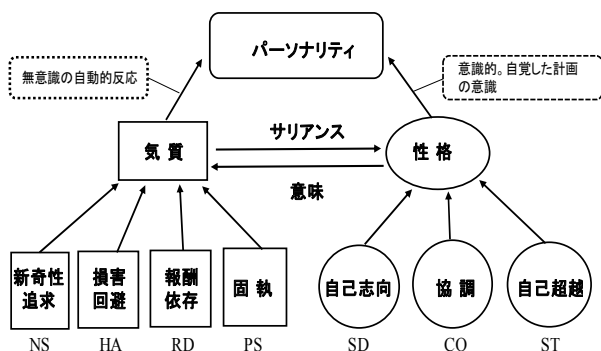


図1. クロニンジャーのパーソナリティ理論の枠組み

表2. クロニンジャー理論の要約

	コアメカニズム	特徴
気質	新奇性欲求 (NS)	行動の活性化次元。新奇で目新しいものに興味。探索行動をする。(ドーパミン) 高群: おしゃべり、衝動的、無秩序、浪費家、易易激性 低群: 慎重、頑固、規則的
	損害回避 (HA)	行動の抑制次元。嫌悪刺激に敏感。罰や損害を回避。(セロトニン) 高群: 心配性、悲観的、易疲労性 低群: 外向的、楽観的、リスク一好む
	報酬依存 (RD)	行動の維持次元。学習の報酬に敏感。人への関心。(ノルアドレナリン) * 女性有意・性差あり 高群: 共感的、情緒的、感傷的 低群: 孤立、冷静、無関心、批判的
	固執 (PS)	報酬依存から独立。物事の持続・継続。(神経伝達物質は?) 高群: 完全主義、熱心、忍耐強い 低群: 適当、飽きやすい
性格	自己志向性 (SD)	自己の次元における成長。自己受容。 高群: 責任感、臨機応変 低群: 無責任、柔軟性が低い
	協調性 (CO)	社会の次元における成長。他者受容。 高群: 共感的、思いやり、寛容 低群: 非人情的、排他的
	自己超越性 (ST)	宇宙の次元における成長。スピリチュアルなものを受容。 高群: 高い創造性、芸術肌 低群: 現実的、物質的、無神論的

出典: 丹野(2003), 国里・山口・鈴木(2004), 中川・佐藤(2010), 木島(2014)をもとに作成

クロニンジャー(1993)はこの理論を提唱した当初、新奇性欲求、損害回避、報酬依存の3気質のみを仮定し、この3つの気質次元を測定する尺度としてTPQ (Tridimensional Personality Questionnaire)を開発したが、表中(表2)にあるように各3気質は中枢神経系の神経伝達物質であるドーパミン、セロトニン、ノルアドレナリンとの関連を想定していた(丹野, 2003; 木島, 2014)。その後、TPQがTCI (Temperament and Character Inventory)へと改訂され、4番目の気質特性として報酬依存から固執が追加された。この固執については元来、TPQでは報酬依存の下位因子であったが、木島他(1996)・木島(2000)によると、Starlings et. al. (1996)が双子研究データを詳細に検討した結果、固執は報酬依存の他の下位因子尺度との相関が低く、また因子分析結果からも独立していることを示したとしている。

藤岡・三浦(2009)はクロニンジャーのパーソナリティ理論の気質4因子のみを使用して、怒り、悲しみおよび恐れといったネガティブ情動の情動制御の関連について検討した結果、固執が情動の原因を考えることで情動を制御しようとする態度に関連し、報酬依存が高いほど感情表出の調整をしない傾向にあることを報告している。理由として、報酬依存は社会的報酬、中でも人との関わりの中で行動を調節するゆえ、他者を行動調整のリソースとする傾向が高く、一方的感情表出は他者への助力に繋がるためだとしている。一方、藤岡・三浦(2009)は同じ怒り、悲しみおよび恐れの種類3種類の感情を扱い、怒りの感情を一方的に表出することは、他者との関係が崩れてしまう場合も多く、他者からの助力を引き出すことには繋がらないとしており一定していない。

## 2. 目的

本研究では、青年期にある大学生の怒りの感情を体験

後の感情制御方略が、一方的表出、建設的表出、抑制、建設的抑制、第3者への表出のどの方略と密接な関連があるのかを検討する。

また、怒りの感情制御方略が既述のクロニンジャーの唱える無意識的な行動として発露しがちな4気質に由来するものか、それと対比的な家庭・家族内の共有環境ではなく、非共有環境の中で経験的・学習的に培われた意識的な行動として現れる3性格によるものかを、クロニンジャー理論に基づく尺度(TCI)を使用して検討することも目的とする。

さらに、TCI尺度の使用にあたり、上述の従来からパーソナリティ特性の主流である5因子特性論に基づく尺度との対比もあわせて検討することを目的とする。

よって、怒りの感情制御方略とクロニンジャーの7次元モデルのそれぞれとの関連・影響を以下の仮説に基づいて検討する。

・仮説①：新奇性追求(NS)は、衝動的になりやすいため、抑制が効かないことが予想されるゆえ、怒りの感情制御方略では一方的表出に正の影響があるのではないかと推測される。

・仮説②：損害回避(HA)は、行動の抑制と強く関連し、心配や不安傾向があるゆえ、他者との関係が壊れてしまうのを過度に恐れ、感情を押し殺しやすいため、怒りの感情制御方略の抑制に正の影響があるのではないかと推測される。

・仮説③：報酬依存(RD)は、関係性の維持を重視し、共感的に接する傾向にあるため、怒りの感情制御方略では抑制に正に影響するのではないかと推測される。

・仮説④：固執(PS)も報酬依存同様、持続・継続と関連し、忍耐強さに特徴があるため、抑制と正の関連があるのではないかと推測される。

・仮説⑤：自己志向性(SD)は、目的や価値に合わせて行動を臨機応変に自己コントロールしようとするため、問題解決に向けて冷静に話し合えることが予想され、怒りの感情制御方略の建設的抑制と正の影響があるのではないかと推測される。

・仮説⑥：協調性(CO)も共感的、思いやりなど相手への配慮が予測されるゆえ建設的抑制と正の影響が予測される。

・仮説⑦：自己超越(ST)は、形而上的・スピリチュアルの側面が特徴としてあげられ、いわば達観の域にあるとも考えられるゆえ、感情制御方略には関連・影響を与えないのではないかと推測される。

・仮説⑧：怒りの感情体験をし感情表出したその後の第3者への感情表出の制御方略は、抑制や認知的再評価の影響が考えられ、建設的抑制もしくは建設的表出と正の関連があるのではないかと推測される。

・仮説⑨：性差は、女性の方が男性よりも共感的、同情的であるため先行研究でも一貫して報酬依存(RD)が高いゆえ、行動の維持との関連からも怒りの感情制御方略については、抑制もしくは建設的抑制と正の関係があると推測される。

本研究の目的が達成された場合、感情を上手くコントロールできない個人への支援方法やその感情制御方略の啓発・開発のあり方について、何らかの提言や今後の課題を示すことができるのではないかと考える。また、依然としてわが国ではクロニンジャー理論に基づく尺度とパーソナリティとの関連を検討した研究や他の性格検査とを比較検討した研究は稀有であるため、今後の研究の一助となることを期待して本研究に取り組む。

### 3. 方法

#### 3-1. 調査対象者

東海地方在住の大学生240名、関東地方在住の大学生30名、関西地方在住の大学生80名の計320名(男性107名、女性203名、不明10名)を調査対象者とした。有効回答数は291名(男性96名、女性192名、不明3名)、平均年齢は20.26歳( $SD=2.28$ )であった。

#### 3-2. 調査時期

2016年9月下旬から11月上旬にかけて実施した。

#### 3-3. 手続き

P県内の大学での調査は調査者が行った。その他、地方の大学での調査は、調査協力者に実施を依頼した。

P県内の大学については、フェイスシートと調査者の口頭による説明を行い、調査参加の同意が得られた者に限り、調査用紙への回答を求めた。その他地方の大学については、調査協力者が上記の説明を口頭により行った。行う際には、回答者の年齢、性別の記入を求めた。

#### 3-4. 使用尺度

(1) Temperament and Character Inventory60 ;TCI60 (Cloninger, 1993 ; 木島ら, 1996)

クロニンジャーのパーソナリティ理論に基づく性格構造を測定するための尺度であり、本来は250項目を超えるが、短縮版60項目を使用する。いずれも4件法である。

前述の気質・性格の7特性の下位因子によって構成され、短縮版の妥当性・信頼性については、木島をはじめ国際的に研究者により確認中である。

(2) 日本語版 Ten Item Personality Inventory ;TIPI-J (小塩・阿部・カトローニ, 2012)

ビッグファイブの5次元(外向性, 協調性, 勤勉性, 神経症傾向, 開放性)を測定する尺度で、10項目の7件法である。妥当性等は、小塩他(2012)により確認済である。

(3) 情動制御尺度(宮明・伊藤, 2014)

個人がどのように情動制御を行っているか測定するための尺度であり、23項目の5件法である。建設的抑制, 一方的表出, 建設的表出, 抑制の4つの下位因子によって構成されている。妥当性・信頼性については宮明・伊藤(2014)によって確認されている。

(4) 怒りの感情制御尺度(吉田・高井, 2008)

怒りの感情制御を個人がどのように行っているかを測定する尺度であり、4項目の7件法である。本研究では第三者の表出(4項目)のみを使用した。妥当性・信頼性は、吉田・高井(2008)により確認済みである。

怒りの感情制御尺度は、感情体験をしたその後に焦点を当て、個人がどのように感情を制御しているのかを調査するものであり、その場のみの感情制御方略だけでなく、感情体験をしたその後、第三者への表出を入れることで個人がどのような感情制御を行っているのが細分化され、抑制もしくは認知的再評価との関連が予想されるゆえ、本研究の目的達成に繋がると考えられる。

### 3-5. 倫理

調査の実施に当たり、東海学院大学倫理委員会に申請書を提出し承認を得た【許可: 2016年7月19日。承認ID2016-04 主題「大学生の感情制御と Cloninger パーソナリティ理論との関連について」

## 4. 結果

### 4-1. クロニンジャー7特性と感情制御との相関

クロニンジャー理論の7特性と感情制御との相関係数を算出し一覧表にした(表3)。その結果、気質面で新奇性欲求(NS)と感情制御方略の一方的表出( $r = .13, p < .05$ ), 第三者への表出( $r = .22, p < .01$ )共に弱い正の相関が見られた。HA(損害回避)では、感情制御の一方的表出( $r = .13, p < .05$ )に弱い正の相関, 抑圧( $r = .41, p < .01$ )に中程度の正の相関がみられた。また、RD(報酬依存)では、感情制御の一方的表出( $r = .15, p < .01$ ), 建設的表出( $r = .12, p < .01$ )共に弱い正の相関, 第三者への表出( $r = .37, p < .01$ )は中程度の正の相関がみられた。さらに、PS(固執)では、感情制御の建設的抑制( $r = .16, p < .01$ ), 第三者への表出( $r = .18, p < .01$ )共に弱い正の相関がみられた。一方、性格のSD(自己志向性)については、感情制御の抑圧( $r = -.25, p < .01$ )に中程度の負の相関がみられた。また、CO(協調性)では、一方的表出( $r = -.17, p < .01$ )に弱い負の相関がみられた。ST(自己超越性)では感情制御との相関はみられなかった。

### 4-2. クロニンジャー7特性と感情制御との関連

クロニンジャー理論の7特性の各側面と怒りの感情制御方略がどのように関連しているのか検討するために、クロニンジャー理論の7特性を説明変数とする重回帰分析を行った(表4)

その結果、固執(PO)と協調性(CO)から建設的抑制に対する標準偏回帰係数( $\beta$ )が有意であった。同様に損害回避(HA)と報酬依存(RD)から一方的表出への正の標準偏回帰係数, 協調性(CO)と自己志向性(SD)から一方的表出への負の標準偏回帰係数が有意であった。

表 3. クロニンジャー理論の7特性と感情制御との相関分析

	1:NS	2:HA	3:RD	4:PS	5:SD	6:CO	7:ST	8	9	10	11
1. NS (新奇性追求)	—										
2. HA (損害回避)	-0.13 *	—									
3. RD (報酬依存)	0.40 **	-0.27 **	—								
4. PS (固執)	0.20 **	-0.22 **	0.21 **	—							
5. SD (自己志向性)	0.17 **	-0.62 **	0.36 **	0.53 **	—						
6. CO (協調性)	-0.20 **	-0.25 **	0.29 **	-0.19 **	0.21 **	—					
7. ST (自己超越性)	0.35 **	0.08	0.07	0.42 **	0.07	-0.41 **	—				
8. 建設的抑制	0.08	0.02	0.05	0.16 **	0.05	0.11	0.05	—			
9. 一方的表出	0.13 *	0.13 *	0.15 *	0.06	0.01	-0.17 **	0.01	0.26 **	—		
10. 建設的表出	0.06	0.04	0.12 *	0.07	0.03	0.05	0.04	0.47 **	0.41 **	—	
11. 抑制	0.00	0.41 **	-0.08	-0.03	-0.25 **	-0.08	0.00	0.46 **	0.63 **	0.42 **	—
12. 第三者への表出	0.22 **	0.10	0.37 **	0.18 **	0.10	0.03	0.08	0.44 **	0.46 **	0.41 **	0.51 **

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表 4. クロニンジャー7特性の重回帰分析の結果

目的変数/ 説明変数	建設的 抑制	一方的 表出	建設的 表出	抑圧	第三者へ の表出
1. NS (新奇性追求)	0.13	0.06	0.03	0.09	0.08
2. HA (損害回避)	0.06	0.20 **	0.10	0.40 ***	0.26 ***
3. RD (報酬依存)	-0.07	0.24 **	0.09	0.01	0.37 ***
4. PS (固執)	0.26 **	0.01	0.07	0.14	0.14
5. SD (自己志向性)	-0.10	0.10	0.00	-0.10	0.03
6. CO (協調性)	0.23 **	-0.26 ***	0.08	0.02	0.00
7. ST (自己超越性)	-0.01	-0.15 *	0.00	-0.09	-0.05
<i>adj.R<sup>2</sup></i>	0.04 *	0.09 ***	0.00	0.16 ***	0.18 ***

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$   
注. 表中の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) を示す。

しかし、7 特性から建設的表出に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった。損害回避 (HA) から抑制に対する標準偏回帰係数が有意であり、損害回避 (HA) と報酬依存 (RD) から第三者への表出に対する標準偏回帰係数が有意であった。

#### 4-3. 感情体験後の感情制御との関連

建設的抑制・一方的表出・建設的表出・抑制は怒り感情を体験した直後の感情制御方略である。これら感情制御の方略を説明変数とし、その後の感情制御について第三者への表出を目的変数として重回帰分析を行った (表 5)。

表 5. 感情制御における重回帰分析の結果

(説明変数)	B	SE	B	$\beta$
建設的抑制	0.26	0.07	0.22	***
一方的表出	0.25	0.08	0.21	**
建設的表出	0.14	0.07	0.12	*
抑制	0.30	0.09	0.22	**
<i>adj.R<sup>2</sup></i>		.35	***	

目的変数: 第三者への表出  
\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

その結果、建設的抑制、一方的表出、建設的表出、抑制から第三者への表出に対する標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) が有意であった。

#### 4-4. クロニンジャー理論と感情制御方略との関係

既述のクロニンジャー理論の7次元パーソナリティモデルの枠組み (図 1) を相関分析や重回帰分析結果からまとめて図示した (図 2)。

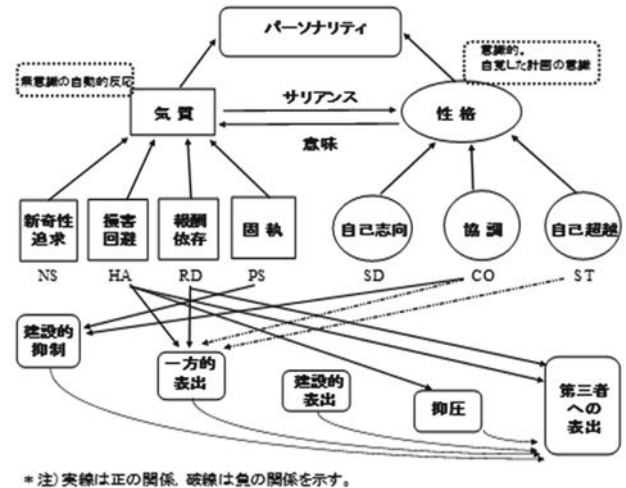


図2. クロニンジャー理論7特性と怒りの感情制御方略

#### 4-5. 性差の検討

クロニンジャー理論の7次元モデルと怒りの感情制御方略における男女差について  $t$  検定を行った (表 6)。

その結果、クロニンジャー理論の7特性における気質面の4特性において、損害回避 (HA) ( $t = -2.82$ ,  $df = 276$ ,  $p < .05$ ), 報酬依存 (RD) ( $t = -2.27$ ,  $df = 275$ ,  $p < .01$ ) で男性よりも女性の方が有意に得点が高かった。一方、性格面の3特性には性差は見られなかった。また、怒りの感情制御方略では、一方的表出 ( $t = -2.40$ ,  $df = 281$ ,  $p < .05$ ), 抑制 ( $t = -4.06$ ,  $df = 280$ ,  $p < .001$ ), 第三者への表出 ( $t = -4.85$ ,  $df = 286$ ,  $p < .001$ ) でも、男性よりも女性の方が有意に高得点であることが明らかになった。他の建設的抑制・建設的表出で性差は認められなかった。

表 6. 男女別の平均値とSDおよび  $t$  検定の結果

	男性		女性		$t$ 値
	M	SD	M	SD	
NS (新奇性追求)	28.50	5.11	28.47	4.50	0.05
HA (損害回避)	24.89	6.18	26.98	5.62	-2.82 **
RD (報酬依存)	21.49	3.64	22.67	4.24	-2.27 *
PS (固執)	13.83	3.71	14.30	3.20	-1.07
SD (自己志向性)	28.90	5.55	29.11	6.00	-0.27
CO (協調性)	30.63	6.03	31.29	5.36	-0.93
ST (自己超越性)	17.40	5.96	17.70	5.04	-0.43
建設的抑制	19.10	7.34	19.97	4.91	-1.19
一方的表出	20.57	6.09	22.31	5.57	-2.40 *
建設的表出	14.47	5.53	15.37	6.06	-1.21
抑制	15.17	5.90	17.70	4.37	-4.06 ***
第三者への表出	14.55	8.12	18.68	6.03	-4.85 ***

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

#### 4-6. TCI60 と TIPI-J との比較

TCI60 と TIPI-J の各変数間の相関係数を算出し一覧表にした (表 7)。

表 7. TCI60とTIPI-Jの相関係数

	外向性	神経症傾向	調和性(協調性)	勤勉性(誠実性)	開放性
NS (新奇性追求)	0.36 **	0.02	-0.03	-0.10	0.35 **
HA (損害回避)	-0.47 **	0.48 **	-0.10	-0.35 **	-0.30 **
RD (報酬依存)	0.42 **	-0.06	0.11	0.11	0.22 **
PS (固執)	0.30 **	-0.10	0.01	0.35 **	0.38 **
SD (自己志向性)	0.40 **	-0.37 **	0.20 **	0.46 **	0.44 **
CO (協調性)	0.10	-0.10	0.31 **	0.03	-0.09
ST (自己超越性)	0.14 *	0.05	-0.09	0.11	0.24 **

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

その結果、クロニンジャー理論の気質4特性において、新奇性追求(NS)と外向性( $r = .36, p < .01$ )および開放性( $r = .35, p < .01$ )で中程度の正の相関がみられた。損害回避(HA)と外向性( $r = -.47, p < .01$ )、開放性( $r = -.30, p < .01$ )および勤勉性( $r = -.35, p < .01$ )には中程度の負の相関を示し、神経症傾向( $r = .48, p < .01$ )とは中程度の正の相関を示した。また、報酬依存(RD)は外向性( $r = .42, p < .01$ )と中程度の正の相関を示し、開放性( $r = .22, p < .01$ )と弱い相関を示した。そして、固執(PS)と外向性( $r = .30, p < .01$ )、開放性( $r = .38, p < .01$ )および勤勉性( $r = .35, p < .01$ )に中程度の正の相関を示した。

次に、クロニンジャー理論の性格3特性では、自己志向性(SD)では外向性( $r = .40, p < .01$ )、開放性( $r = .44, p < .01$ )、勤勉性( $r = .46, p < .01$ )に中程度の正の相関を示し、調和性( $r = .20, p < .01$ )は弱い正の相関を示し、逆に神経症傾向( $r = -.37, p < .01$ )では中程度の負の相関を示した。また、協調性(CO)は調和性( $r = .31, p < .01$ )のみに中程度の正の相関を示した。さらに、自己超越性(ST)では外向性( $r = .14, p < .05$ )および開放性( $r = .24, p < .01$ )に弱い正の相関を示した。

## 5. 考察

本研究は、怒り感情に関する5つの感情制御方略とクロニンジャー理論の7特性との関連について仮説設定(仮説①~仮説⑨)を行い、その検証を主な目的とし、さらに、クロニンジャー理論を基とした尺度の短縮版TCI60とビッグファイブや5因子論を基とした尺度の短縮版TIPI-Jの2つの性格検査の比較・検討をも含めて目的としていた。

### 5-1. 仮説検証

#### 5-1-1. 仮説①：新奇性追求(NS)

「新奇性欲求は、衝動的になりやすいため、抑制が効かないことが予想されるゆえ、怒りの感情制御方略では一方的表出に正の影響があるのではないかと予測したが、NSと怒りの感情制御方略の一方的表出とは弱い正の相関、また、第三者への表出とも弱い正の相関を示した。そして、重回帰分析結果では、一方的表出に関連するのはHA・RD・COの3気質と性格のSTであった。よって、仮説①は一部支持されただけであった。NSの新奇刺激に対するリアクションの大きさや衝動的な意思決定の特徴は、怒りの感情制御において一方的表出との結びつきは弱かった。この結果から、無意識の自発的傾向であるNSの新奇性は怒り・哀しみ等のネガティブな感情の影響は薄く、喜び・楽しみといったポジティブな感情との関連が伺えるのではないかと考えられる。

#### 5-1-2. 仮説②：損害回避(HA)

「損害回避(HA)は、行動の抑制と強く関連し、心配や不安傾向があるゆえ、他者との関係が壊れてしまうのを過度に恐れ、感情を押し殺しやすいため、怒りの感情制御方略の抑制に正の影響があるのではないかと予測したが、HAと怒りの感情方略の抑制との間には中程度の正の相関がある一方、HAは一方的表出とも弱い正の相関を示した。また、重回帰分析結果でもHAは抑制とだけ関連を示した。それゆえ、仮説②はほぼ支持されたと考えられる。

#### 5-1-3. 仮説③：報酬依存(RD)

「報酬依存(RD)は、関係性の維持を重視し、共感的に接する傾向にあるため、怒りの感情制御方略では抑制に正に影響するのではないかと仮定したが、RDと抑制および建設的抑制との間に相関はなく、正反対に、一方的表出および建設的表出に弱い正の相関、第三者への表出に中程度に近い正の相関がみられた。そして、重回帰分析でも、RDは一方的表出、第三者への表出に影響を与えていた。よって、仮説は棄却されたが、これは既に表示のごとく、情にもろく他者に依存傾向をもち、最終的に得る報酬への期待を持続するRDの別の特徴の発露と考えられるのではないだろうか。

#### 5-1-4. 仮説④：固執(PS)

「固執(PS)も報酬依存同様、持続・継続と関連し、忍耐強さに特徴があるため、抑制と正の関連があるのではないかと仮定したが、PSは建設的抑制と弱い正の相関だけでなく、第三者への表出とも弱い正の相関を示した。しかし、重回帰分析では感情方略の中で建設的抑制

にのみ影響を及ぼしていたゆえ、上述の仮説はほぼ支持されたのではないかと考えられる。つまり、RD や PS はクロニンジャー理論では無意識的で自動行動としての気質側面が強いと思われたが、そうではなく、対人関係において関係維持・保持のために、抑制的機能ではなく認知的再評価を行うことが第3者への表出からも伺える。

#### 5-1-5. 仮説⑤：自己志向性 (SD)

「自己志向性 (SD) は、目的や価値に合わせて行動を臨機応変に自己コントロールしようとするため、問題解決に向けて冷静に話し合えることが予想され、怒りの感情制御方略の建設的抑制と正の影響があるのではないか」の仮説に対し、SD は怒りの感情方略の抑制と弱い負の相関を示したのみであったが、一方、重回帰分析結果では、SD は5つの感情制御方略のどれにも影響を与えていなかった。よって、仮説は棄却されたが、この結果から、意識的・計画的な反応と捉え、自己受容を基盤とするSDは怒りの感情を自分の内面へと抑制しないが、自己意思決定や行動管理能力をもつ特徴をもつため、怒りというネガティブ感情の表出をセルフコントロールしているのではないかと伺える。

#### 5-1-6. 仮説⑥：協調性 (CO)

「協調性 (CO) も共感的、思いやりなど相手への配慮が予測されるゆえ建設的抑制と正の影響が予測される」の仮説では、意識的・自覚的な側面のあるCOは一方的表出と弱い負の相関を示し、重回帰分析結果では建設的抑制に正の、一方的表出に負の関連を示した。よって、仮説は部分的支持にとどまった。この結果から、COは怒りの感情方略に関しては他者受容のために一方的な表出は抑え、抑制機能および再認知的評価によって建設的に抑制し、関係調整を図っていることが伺える。

#### 5-1-7. 仮説⑦：自己超越 (ST)

「自己超越 (ST) は、形而上的・スピリチュアル的側面が特徴としてあげられ、いわば達観の域にあるとも考えられるゆえ、感情制御方略には関連・影響を与えないのではないか」という仮説どおり、STは5つの怒りの感情方略と相関を示さず、重回帰分析結果でも一方的表出との関連が見られただけであった。よって、仮説はほぼ支持されたとと言える。

#### 5-1-8. 仮説⑧：第3者への感情表出

「怒りの感情体験をし感情表出したその後の第3者への感情表出の制御方略は、抑制や認知的再評価の影響が

考えられ、建設的抑制もしくは建設的表出と正の関連があるのではないか」の仮説を設定したが、第三者へ感情表出は、建設的抑制・一方的表出・建設的表出・抑制の感情方略と中程度の正の相関を示し、重回帰分析結果も同様に建設的抑制・一方的表出・建設的表出・抑制の感情方略との関連・影響を示した。よって、仮説は部分的な支持にとどまった。つまり、感情体験直後の時間的経過が無い場合でも瞬時に抑制機能や認知的再評価がなされ、それが第3者への表出につながっているのではないかと考えられる。その証左として、第3者への表出は先のクロニンジャーの7特性の重回帰分析結果でも、HAとRDが影響を与えていた。つまり、怒り感情の表出による損害を回避し、保身につながるような関係性の維持という報酬・利益に依存する傾向に表れていると言える。

#### 5-1-9. 仮説⑨：男女差

「性差は、女性の方が男性よりも共感的、同情的であるため先行研究でも一貫して報酬依存 (RD) が高いゆえ、行動の維持との関連からも怒りの感情制御方略については、抑制もしくは建設的抑制と正の関係があると推測される」の仮説で、t検定をした結果では、RDとともにHAで女性の方が男性よりも得点が有意に高かった。また、怒り感情の感情制御方略でも、抑制だけでなく、一方的表出・第三者への表出で女性が男性より有意に得点が高かった。よって、この仮説は部分的な支持にとどまった。つまり、一方的表出と抑制の対比的な感情方略は、怒り感情の抑制をしないかのどちらかであり、結果として怒り感情の体験後、情緒的・感傷的といった男性より女性に特有の無意識による行動様式の気質側面である同調志向 (RD) と、罰や損害を回避する自動的回避行動 (HA) として第三者への感情表出という行動につながるようである

### 5-2. 感情体験直後の感情制御方略とその後の感情制御方略との関連

怒り感情直後の感情表出から時間的経過を経た第三者への表出は建設的抑制や建設的表出だけでなく、抑制および一方的表出という全感情制御方略との関連が伺えた。これは時間の長短や意識・無意識に関わらず抑制と認知的再評価というプロセスが働いた結果であろうと推察される。このことは、クロニンジャー理論の7特性では損害回避 (HA) および報酬依存 (RD) の2気質が第3者への表出との関連を示していたことから了解できる。



つまり、即座に怒り感情を一方的表出した場合、HA の嫌悪意識に敏感で自分がこうむる損害を回避する性向と、RD の人との関係性維持の性向により、認知的再評価によって第3者への表出を行うのではないだろうか。また、無意識的に怒りの感情を抑制した場合も同様にHAの他者からこうむる罰や損害を回避する性向が第3者への表出につながるのではないだろうか。

### 5-3. 性差の比較・検討

クロニンジャー理論の Cloninger<sup>7</sup> 特性のうち、木島他 (1996) や中川・佐藤 (2010) らの先行研究での実証をはじめ、気質次元の成功報酬 (RD) で男性よりも女性の方が有意に得点差として現れることが当初から示されていたが、本研究もそれを支持する結果を示した。

また、RD 以外に気質次元の損害回避 (HA) でも本研究では男性よりも女性の得点が有意に高かった。HA は不安や心配を特徴とし、下仲・中里 (1989) のストレス状況下において女性の方が不安を感じるとの示唆を本研究も支持することとなった。

怒り感情の感情制御方略と性差では、一方的表出と抑制、第三者への表出の3方略で男性より女性の方が得点で有意に高い結果を示したが、上述のようにこれらの感情制御方略に性差が生じたのは、HA だけでなく RD にも気質的特性に性差が存在することの裏付けを示していると思われる。

### 5-5. TCI60 と TIPI-J の比較・検討

#### 5-5-1. 外向性

TCI と TIPI-J との相関分析でビッグファイブ理論における5因子のうち的外向性は、クロニンジャー理論の7特性において4気質のうち、新奇性欲求 (NS)、報酬依存 (RD)、固執 (PO) と正の相関、損害回避 (HA) と負の相関を示した。また、3性格面では自己志向性 (SD) と自己超越性 (ST) で正の相関を示した。結局、相関が無かったのは協調性 (CO) だけであった。外向性は報酬への反応というコアメカニズムを要するので RD とは正の、HA とは負の相関が予測され、また、神経伝達物質でドーパミンと関わるため新奇性欲求 (NS) との関連が予測されたが、その通りの結果を示した。さらには、外向性が気質の他の性向 (PS) や性格の他の2性向 (SD・ST) とも相関することから、意識的・無意識的な行動の両面を含む多面的な性向を伺えることができた。

#### 5-5-2. 神経性傾向

神経症傾向はクロニンジャー<sup>7</sup> 特性の損害回避 (HA) と正の相関、自己志向性 (SD) と負の相関を示した。不

安や心配を特徴とする HA との関連はセロトニンの神経伝達物質が同一ゆえ当為のごとく予測されたが、SD との負の相関は、神経症傾向は結果的に自己受容できないほどの不安や心配感に強く関連することを示すといえるようである。

#### 5-5-3. 開放性

開放性はクロニンジャー<sup>7</sup> 特性では素人理論として容易に自己超越性 (ST) との関連を想像させるが、結果的には4気質のうちの新奇性欲求 (NS)、固執 (PS)、報酬依存 (RD) と正の相関、損害回避 (HA) と負の相関を示し、3性格でも自己志向性 (SD) と自己超越性 (ST) に正の相関を示した。したがって、開放性は外向性と類似した性向を示し、意識的・無意識的な行動に関わらず同様な多様性を伺わせた。

#### 5-5-4. 勤勉性

勤勉性は反応抑制が機能の中核としてあるゆえ<sup>7</sup> 特性では同じ次元である気質の損害回避 (HA) と正の関係が予測されたが、固執 (PS) と性格の自己志向性 (SD) と正の相関、予測とは逆に HA と負の相関を示した。これは、PS は持続・継続して忍耐強く熱心に完璧にこなす作用であり、SD は責任感が強く合目的に行動を調整する機能であるゆえ、勤勉性を誠実性ととらえるむきがあることから、HA という好ましくない状況に対して行動抑制する意識的な働きと対比的に関連するのではないだろうか。

#### 5-5-5. 調和性

調和性は協調性とするむきもあるように、7特性では素朴理論のごとく協調性 (CO) との関連が予測され、その通り正の相関を示した。また、自己志向性 (SD) で正の相関を示したゆえ、調和性は、自己の意思決定や行動のコントロール (SD) と他者に寛容・共感性 (CO) と関連することから、自己と社会、自己受容と他者受容の両面性を意識的に発揮できる性質をもつものであることが示唆された。

## 6. 結論

### 6-1. まとめ

喜怒哀楽の感情制御方略では、喜び・楽しみの表出・抑制は共感をよびやすく対人関係の軋轢は生じにくいであろうし、哀しみの表出・抑制も同情を寄せやすいため他者に対して摩擦は生じにくいであろう。怒り感情の表出・抑制だけは被表出者にとっては関係性の問題を孕むゆえ、その感情制御方略が必要となる。そこで、本研究

は、怒り感情の表出・抑制の方略と使用をクロニンジャー理論の7特性との関連を実証的研究によって考察した。

クロニンジャー理論の7特性は無意識的な行動を特徴とする4気質と意識的・自覚的な行動をメカニズムに持つ3性格により概念構成されている。これを感情制御方略に当てはめれば、一方的表出・抑制が4気質、建設的表出・建設的抑制、第3者への表出が3性格との関連が予測された。結果は単純な予測どおりとならず、一方的表出は気質の損害回避(HA)・報酬依存(RD)と正の関連を明らかにしたが、性格の協調性(CO)・自己超越(ST)と負の関連も示したのを初めとして、抑制も気質のHAの影響を示しただけであった。また、建設的表出は4気質だけでなく3性格とも関連が認められなかった。建設的抑制は3性格ではCOのみに関連が見られた一方で4気質のうちの固執(PS)の影響も明らかとなった。また、いずれの感情方略も第3者への表出との関連が見られたが、クロニンジャー7特性ではHAとRDの2気質が第3者との関連を明らかにした。クロニンジャー7特性とビッグファイブ5特性との比較も同様に、外向性・開放性は4気質との相関を示したが、外向性はSD・STの2性格と、開放性はSTの1性格との相関を示したように意識的・無意識的の両面性を含むことが明らかになった。神経症傾向も気質のHAと性格のSDとの相関という両面を示した。一方で、勤勉性はHAとPSの2気質のみと関連し、調和性は性格のCOだけでなくSDの2性格との相関を明らかにした。

神経伝達物質との関連においても、クロニンジャー7特性のNSとビッグファイブ5特性の外向性はドーパミンの作用に関連するはずであるが、NS自体は怒りの感情制御方略には関係していなかった。7特性論のHAと5特性論の神経症傾向はセロトニンの影響を伴うとされるが、神経症傾向はSDとも関連していたように単純に分類されるわけではないことも明らかにした。

第3者への表出は抑制と再認知的評価の典型であろうが、意識的な行動をとる3性格に影響を受けておらず、無意識的な行動が想定されたHA・RDの2気質との関連が明らかとなった。このHA・RDと一方的表出および抑制との関連を考えると、抑制と認知的再評価は感情表出する瞬時にも作用していると伺える。

## 6-2. 今後の課題と展望

怒りの感情制御とパーソナリティとの関連について検

討したが、感情制御方略の対象となる相手との関係性は重要な要素である。吉田・高井(2008)は地位や親密性により感情制御方略は変化すると報告しており、感情制御の背景には関係性による要因の影響が考えられ、今後は関係性を考慮に入れて検討する必要があるだろう。

また、今回の怒り感情では怒りを感じる程度は設定しなかった。山口(1996)は、相手から与えられた損害の大小、相手の意図、損害の予測性という3要因に応じて怒りを感じる程度が異なること示唆している、今後は怒りの程度も踏まえて検討することが望まれる。

さらに、本研究は関東・東海・関西と広範囲に在籍する大学生291名の回答をもとに分析したが、女性の回答数が男性の約2倍あり男女の比率が結果に影響した可能性は否めない。今後はより広範囲に、男女の比率を同程度にした調査を行うことも課題であろう。

## 謝辞

本研究は、今春東海学院大学大学院人間関係研究科修士課程を修了した富岡美咲さんの修士論文を基に、再統計処理を行って図表を一新し、加筆修正等を施したものです。

本研究の質問紙調査に快く引き受け、協力してくださった山口仁久先生(四天王寺大学)、相原延英先生(名古屋文理大学)、田中康雄先生(浦和大学)をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 明石聡子(2008) 大学生の情動制御と精神的健康との関連：情動制御尺度(国際適応力尺度の下位尺度)の有効性について、人間文化創成科学論叢, 10, 309-317.
- Cloninger, C. (1987) A systematic method for clinical description and classification of personality variants : *A proposal*. *Archives of General Psychology*, 44, 573-588.
- Cloninger, C. (1993) A psychological model of temperament and Character. *Archives of General Psychology*, 50, 975-990
- Daniel, N. (2007) *Personality: What Makes You the Way You Are*, Oxford Landmark Science. (ダニエル・ネットル著, 竹内知世訳(2009) パーソナリティを科学するー特性5因子であなたがわかるー, 白揚社)

- 藤岡久美子・三浦真理 (2009) Cloninger の気質次元と情動経験及び情動制御との関連 山形大学紀要 (教育科学), 14, 4, 29-39.
- Galambos, N. L., & Costigan, C. L. (2003) Emotional and personality development in adolescence. In R. M. Lerner, M. A. Easterbrooks, & J. Mistry (Eds.), *Handbook of psychology: Vol. 6. Developmental psychology* 351-372. New York: Wiley.
- Gross, J. J. (1998). Antecedent- and response-focused emotion regulation: Divergent consequences for experience, expression, and physiology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 224-237.
- Gross, J. J. (1999). Emotion regulation: Past, present, future. *Cognition and Emotion*, 13, 551-573.
- Gross, J.J., & John, O.P. (2003) Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.
- 平川久美子 (2009) 児童期初期における情動表出の制御の理解に関する研究—主張的動機に着目して— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57, 2, 219-238.
- 稲嶺麻希子・遠藤光男 (2009) 感情表出における状況と性別の効果—日本人大学生での検討— 感情心理学研究, 17, 2, 134-142.
- 金井雅仁・湯川進太郎 (2017) 感情制御と感情経験—文化的自己観の個人差を踏まえた検討— 筑波大学心理学研究 54, 17-27
- 樫村正美・岩満優美 (2007) 感情抑制傾向尺度の作成の試み—尺度開発と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, 20, 2, 30-41.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996) Cloninger の気質と性格の 7 因子モデルおよび日本版 Temperament and Character Inventory (TCI) 季刊精神科診断学, 7 (3), 379-399.
- 木島伸彦 (2000) パーソナリティと神経伝達物質の関係に関する研究: Cloninger の理論における最近の研究動向 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学, 28, 1-11.
- 木島伸彦 (2014) クロニンジャーのパーソナリティ理論入門 北大路書房
- 国里愛彦 山口陽弘 鈴木伸一 (2008) Cloninger の気質・性格モデルと BigFive モデルとの関連性, パーソナリティ研究, 16, 1, 324-334.
- Matsumoto, D. LeRoux, A.J., Iwamoto, M., Choi, J., Rogers, D., Tatani, H., & Uchida, H. (2003) The robustness of the intercultural adjustment potential scale (ICAPS): the search for a universal psychological engine of adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 27, 543-562.
- Matsumoto, D. (2006) Are cultural differences in emotion regulation mediated by personality traits? *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 37, 421-437.
- 宮明浩太郎・伊藤裕子 (2014) 情動制御と親密な他者との関わり 文京学院大学人間科学研究紀要, 15, 215-225.
- 中川明仁・佐藤豪 (2010) Cloninger の気質 4 次元と自己志向の完全主義との関連, パーソナリティ研究, 19, 1, 38-45.
- 大平英樹 (2004) 感情制御の神経基盤—腹側前頭前野による扁桃体活動コントロール— 心理学評論, 47, 93-118
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニビノ (2012) 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み—パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- Pennebaker, J.W (1997) *Opening up*. New York: Guilford Press (ベネベーカー, J.W. 余語真夫 (監訳) (2000) オープニングアップ 北大路書房
- 下仲順子・中里克治 (1989) 性役割と心理的適応—老年世代と青年世代の比較—日本心理学会第 53 回大会論文集, 57.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 (1992) 日本版 NEO-PI-R, NEO-FFI 使用マニュアル, 東京心理株式会社
- Stallings, M.C., Hewitt, J. K., Cloninger, C. R., Heath, A.C., & Eaves, L. J. (1996). Genetic and environmental structure of the Tridimensional Personality Questionnaire: Three or four temperament Dimensions? *Journal of Personality and Social psychology*, 70, 127-140
- 託摩武俊 (1967) 性格はいかにつくられるか, 岩波書店
- 丹野義彦 (2003) 性格と心理—ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ—, サイエンス社
- 鈴木乙史 (1992) 性格はどのように変わっていくか, 読売新聞社
- 塚本伸一 (1997) 子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達の研究 心理学研究, 68, 2, 111-119.
- 山口浩 (1996) 日常生活における怒りと攻撃性の表出, 実験心理学研究, 36, 273-286
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008) 怒り感情の制御に関する調整

要因の検討；感情生起対象との関係性に着目して 感情  
心理学研究, 15, 2, 89-106.

## On the relationship between college students' emotional control and Cloninger's personality theory

Misaki Tomioka and Shozaburo Hirai

### Abstract

We wonder what kinds of strategies for controlling emotions, such as delight, anger, sorrow, and joy, are used by human beings, and how individuals learn the strategies for controlling emotions. In this study, we focused on “anger” which, among different types of emotion, greatly affects interpersonal relationships and conducted hypothesis tests to examine the relations based on Cloninger's theory, which defines personality by 4 temperaments (unconscious and automatic responses) and 3 characters (conscious, intentional and planned responses). The study revealed that emotional control strategies for anger tend to control or maintain harm avoidance and reward dependence dimensions of temperament, which are unconscious responses. The study also identified relations with the expression to a third party, which is related to control and cognitive reappraisal. This trend was more apparent among women. Furthermore, comparison with the scale based on the Big Five Inventory indicated that Conscientiousness showed a relation with the above-mentioned 2 temperaments and Agreeableness with 2 characters which are conscious responses. The remaining Extraversion, Neuroticism and Openness to Experience showed the relations with both temperament and character of Cloninger's theory.

**Keywords: Emotion regulation Personality Cloninger's 7model Big-Five**